

<調査研究シリーズ 96>

# 境界文化考

## — 古代中国の黄河流域 —

豊田 謙二

### はじめに

これから始まる話は、2012年からタイムスリップして約2500年前の中国黄河流域でのことである。そうはいつても、現代の時から過去へ、そして現代への往復運動ではある。時を遡りつつの往復は、過去を現在の視線や感覚によって切り裂く怖れを避けるためである。ここでは、時の境界を越えつつ、その地の文化の境界を探り、またその溶解にも立ち会う、という冒険の旅に出てみたいと思うのである。

あらかじめ「境界」に関して、多少具体的に指示しておいていいだろう。境界は、何かと何か、あるいは人と人とのあいだ、あるいは人ともとのあいだを示している。本稿のなかで扱う境界は、まず熊本県の菊池と中国山東省の曲阜である。次いで、孔子と老子であるが、それは儒教と道教とのあいだでもある。最後に、中国の白酒と黄酒である。人間は相変わらず境界を造り続け、またその境界がかたちを変えつついき続けてもいる。

### 1. 孔子の里・泗水—菊池

熊本県の北部、現在の菊池市に泗水町<sup>しすい</sup>がある。この町名の謂われは、明治期に遡る。1990年(明治22年)町村合併のなかで誕生したその村に、「泗水」の漢字が充てられた。村名の由来に関わる物語は興味深い。『泗水町史』にその由来が説明されている。

「第1代村長西佐一郎氏は合志を孔子とみたて孔子の生まれた山東省曲阜、泗水の地名をとった」。<sup>1)</sup>

この地は当時あっては合志郡であり、「日本書紀」では皮石郡と書かれた地であ

---

1) 熊本県菊池郡泗水町『泗水町史』1965年、6頁

る。村長であり漢学者西佐一郎に関しては、上掲の『泗水町史』に以下のような紹介文が掲載されている。

「現泗水町の命名も氏が名付け親である。当時の清国四川省が地味豊穡、理想の天地だとして泗川の泗を主材し、更に村内を貫流する合志川の四支流、中略の合流する肥沃な土地だとして四川、四水、最後に泗水と命名」された。<sup>2)</sup>

泗水町は2012年を、「泗水誕生百周年記念」として「有明の里・孔子公園」を建設している。その町の泗水孔子公園には、文字通り、「孔子の里」の象徴として、祀聖亭・孔廟などが偉観を誇っている。「しすい孔子まつり」は例年9月第4日曜日に開催されるが、中国本家に負けぬ催しである。

泗水町と命名した当時の日中を取り巻く国際関係は、良好どころか、欧米諸国の帝国主義的アジア侵略の最中であつた。しかも日本はやがて中国大陸への進出を図る、そうした時代にあつた。その最中であつて、熊本には骨太の志士が誕生する。少し紹介したい。明治末期のこれも県北部現在の荒尾市、そこに宮崎滔天(1871-1922年)を含む4兄弟がいた。長兄の八郎はルソーを学び中江兆民と交友。西南の役では西郷隆盛軍に参加し戦死。いずれの兄弟も清国の専制に対抗しつつ、欧米列強に対抗するアジア戦略を構想していたというが、偏狭なナショナリズムに屈っしないのが魅力である。

中国「辛亥革命」(1911年)に身を挺し、清朝政府に現在価値で1000千万円以上の懸賞金が懸けられた、かの孫文(1866-1925年)をかぐまい、しかも中国革命運動への支援活動を展開したのが滔天であつた。彼は1897年(明治30年)に東京で孫文に会い、その運動を理解したという。蛇足ながら、その長男の宮崎龍介は、炭鉱王伊藤伝右衛門の妻柳原白蓮と逃避行、結婚、世紀の大恋愛を成就させた。<sup>3)</sup>

さて、熊本県泗水村があこがれた町、かの孔子の生まれ故郷泗水町、現在の「孔子の里」を訪ねてみたい。

曲阜は現在山東省に属するが漢民族文化勃興の地にある。その地は、黄河中流域において漢民族による古代国家建設が進められたが、曲阜は中国風に表現するとその中原地域に位置している。曲阜は春秋戦国時代における魯のくにの都、山東省の現在の省都はその北に位置する済南市である。

孔子が魯国に生まれたのは紀元前552年、国と国との戦争の最中に官位を求めて放浪したが適わず、郷里に帰還した。中国5千年の歴史でいうと、夏の国の立証は困難であるが、有史としては殷、そして周の古代国家が立証されている。周崩壊以降、国は乱れ、秦の統一に至るまで戦乱の約550年間、戦禍は絶えることがなかった。

2) 『泗水町史』前掲書 303頁

3) フリー百科事典『ウィキペディア』<http://ja.wikipedia>.

だが、その時代「百家争鳴」と言われるように、実に多彩でしかもその後の中国の歴史を支える思想や文書が創られている。

孔子は殷を倒した周の国を基に理想の国を構想するけれども、その殷の国は奴隷制度によって形成された国であった。とはいってもそれは埋蔵文化財からの学びである。その「奴隷」なのだが、日本の古代にも知られている。それは多くが戦争の捕虜や債務奴隷のようである。

武官村大墓では、「上層には東側に 17 人の男性、西側 24 人の女性の遺骸」、「墓室の東西両側には 34 の首が埋められていた」<sup>4)</sup> という。それは殉葬者の「カタログ」である。首だけの埋葬者は奴隷であった。王は蘇る。首だけでは蘇らない。「狩猟の対象は動物や鳥類だけではありません。おもに羌とよばれる異族も生け捕りにしたのです。おおぜいの羌人を生け捕りにできるかどうか、事前に占っています。」「祭祀を重視した殷では禽獣を犠牲にささげると同時に、人間を殺して犠牲に供し」<sup>5)</sup> たのである。

奴隷として犠牲にされた羌人は、「遊牧の子ベツト系の種族」<sup>6)</sup> という。羌人は人間でありながら「奴隷」として生き、そして死す。殷の次に国を治めたのは周である。周には奴隷制がなかったという。殷は食べるものも労働力も他種族から奪いとること、それが「生産」であり戦争であった。周は殷の西方の地域にいて農業を生産の基本としていた。周の武王の時に殷を滅ぼすが、それは紀元前 11 世紀とも 12 世紀とも言われる。

周は殷に「夷狄」<sup>いてき</sup>として扱われた種族連合であり、その指揮を執ったのが武王の弟、周公旦<sup>しゅうこうたん</sup>であった。戦後の論功行賞で山東省曲阜に入り、その国名は魯であった。

周の国づくりの過程において、奴隷制から封建制へ、略奪から農業へと転換する。周は約 800 年の長期政権であり、そのあいだに中国文化の源流が形成されたという。<sup>7)</sup> その周の国を理想と描く語りの思想家が魯の国に誕生する。ここから、新しい物語が始まる。

## 2. 孔子の里・曲阜

周の幽王を最後として、その後 550 年は中原の地域を中心に戦乱の時代である。秦の始皇帝による漢民族の初めての統一政権、その時までを「春秋戦国時代」と呼ぶ。その時代の大きな変化は、鉄製農具の採用による農業生産力の飛躍的な上昇である。

4) 陳舜臣『中国五千年』(上)講談社文庫、1989年、49頁

5) 『中国五千年』前掲書、50頁

6) 同上。

7) 『中国五千年』前掲書、62-66頁

とくに楚は「鋭利で固い武器の産地」であった。<sup>8)</sup>

その戦乱の時代において特筆すべきいまひとつのこと、それは「諸子百家」についてである。私には、戦乱の世における孔子の語り、さてどんな内容であり、何を意図していたのか、とても興味深いのである。日本列島で「くに」が誕生しつつも、だが文字は残されていない。孔子の残した語りは『論語』として集大成されている。『論語』の成立は、孔子の死後のこと、紀元後の早い時期と推定されている。

孔子、その人となりについて、彼の郷里、曲阜のガイドは以下のように案内する。

「孔子は春秋時代末期の思想家であり、政治家であり、教育家でもあり、そして儒教の開祖である。孔子は、晩年には、教育に力を注ぎ、弟子は3千人に上ったとも言われる。中略 漢代以降、時の統治者は揃って彼を尊敬すべき存在として崇め、孔子の思想は2千年に及び、封建文化を基として引き継がれてきた。」<sup>9)</sup>

ここで少し歴史的概観を試みておきたい。そもそも紀元前のことで不明のことがあるが、だが、孔子という「儒」に関する宗教性についての共通の理解を必要としているからである。本稿では孔子の教えに関しては「儒」と表現しているが、「儒教」という表現は、他の2教、道教と仏教との一体性にあるという意味で、明の国以降に使用する。

図-1 曲阜全図



出所：「手絵 曲阜 景游」阳光文化传媒中心，2011年

8) 『中国五千年』前掲書，87-89頁

9) 「手絵 曲阜 景游」阳光文化传媒中心，2011年

孔廟：孔子の墓所。現在から約 2500 年，孔子の死去の翌年紀元前 478 年に建てられた。当初は小さな墓所であったが，現在は曲阜市街区面積の約 5 分の 1 を占めるほどに拡張された。

図-2 孔府



撮影：豊田謙二

孔府：孔子直系子孫の居宅。それは，450 に及ぶ会館・居室・建物からなる迷路である。その建物は中国における最も華麗で，上品な住居群である。そしてまたそれは，孔子の子孫たちの権勢を示している。

孔林：孔子とその子孫の墓所。その総面積 200ha，立木 10 万本以上，中国における人工的公園としては最も広大であり，最良に保護されている共同墓地である。<sup>10)</sup>

孔子が生まれた時には，周はすでに滅び，魯の国になっていた。彼は若き日に故郷を離れ諸国を旅した。帰国したのは 70 歳の頃，紀元前 484 年であったという。彼は世の乱れの元凶は権力者たる支配階級にある，と考えていた。だから，支配階級が範を示すことが課題だ，と考えたのであろうか。諸国を訪ね自説を語り，その意を同じくする君子を探す旅を続けたが，その願いを果たせなかった。

でも，彼の語りは多くの同時代人の賛意を得た。その言語録『論語』を編集したのは，孔子の弟子たちであった。

### 3. 孔子と老子

#### (1) 孔子という人

孔子は紀元前 552 年から前 479 年に生きた。現在からおよそ 2500 年前というから，

10) 『China』，Lonely Planet Publications Pty Ltd, 2011 を参照

日本列島ではいまだ水稲耕作が始まらず、石器中心の縄文の文化期にあった。

孔子は、本名孔丘<sup>きゅう</sup>、父は孔紃<sup>こつ</sup>と言い武人、ただし農民という異説もある。<sup>11)</sup> 母は徴<sup>ちよう</sup>在<sup>みこ</sup>といい巫女であった。孔丘は60歳を超えた父、10歳代の母の間に生まれたが、父は孔丘の幼い頃に亡くなる。<sup>12)</sup> その姓の孔に「子」をつけて、「先生」として尊称された。

「孔子、児たりしとき、嬉戯<sup>きぎ</sup>するに常に俎豆<sup>そとう つら</sup>を陳ね、礼容を設く。」<sup>13)</sup>

上記は司馬遷の『史記』によるが、幼年の孔子は「俎豆」(祭具)を並べて墓式や祭礼の遊びをしたという。その遊びは母の影響を暗示させる。陳は孔子が「礼楽を業とする集団のリーダー」<sup>14)</sup>と推定する。また、貧賤出身の孔子が読み書きできたのは、その職業につくためだと言う。孔子はその母から父の墓所を知りえず、母の死後に、葬式車夫の母親から父の墓所を聞きだし、父母を合葬したという。<sup>15)</sup>

破壊と殺戮、しかも親族同士での戦闘と虐殺、それが当時の日常での出来事とし、しかもそれを封じる手立てのない時代のことである。孔子は諸国、といっても黄河流域での農業地帯のあいだを放浪し、語りながら、そして郷里、曲阜に立ち帰った。孔子の発言記録、つまり『論語』の冒頭が気になる。もちろん孔子亡きあとの弟子たちの所業なのだが、孔子の言動を知りえた側近の感覚が重要と思うのである。

「学びて時にこれを習う、亦た悦ばしからずや。」(学而第一、一)<sup>16)</sup>

著名すぎるほどの一節である。まず自己学習、そして教示を受ける。考えることを重視する孔子には当然の語りである。そこではっと思う。ここは紀元前の世界である。「学ぶ」、それは動物としての「ヒト」から「人間」への転身の階段なのだろうか。でも、人間は他者なしに学べない、そして生きることもできない。では、他者との関わりをどのように捉えるのか。

#### (1) そとへと関わる

「夫子の道は忠恕のみ」(「里仁第四」一五)

「其れ恕か。己の欲せざる所、人に施すこと勿れ」(「衛靈公第二四」)

11) 加地伸行『儒教とは何か』中央公論社、1990年、79頁。

12) 佐久協『論語』NHK出版、2011年、72-73頁

13) 『中国五千年』前掲書、102-103頁

14) 『中国五千年』前掲書、103頁

15) 『中国五千年の歴史』前掲書、102頁

16) 『論語』(金谷沢詠注)岩波書店2001年、以下『論語』からの引用はすべてこの書に負う。

前者は「道」について、後者は「人生」を一言で、という問いに孔子が答えたものである。「怒<sup>じよ</sup>」とは、思いやること、ゆるすこと、とある。<sup>17)</sup> その態度は他者の立場に立って、その行為を認めることであり、また、「私にして欲しくないことは、他の人にもするな」、という倫理の表明でもある。氏族のあいだから出て、見知らぬ他者とのあいだをつなぎたい、その時代、その時の関わりの基本である。

(2) うちへと関わる

「弟子<sup>ていし</sup>、入りては則ち孝<sup>い</sup>、出でては則ち弟<sup>すなわち</sup>、謹<sup>い</sup>しみて信<sup>い</sup>あり、汎<sup>ひろ</sup>く衆を愛して仁に親しみ、行<sup>い</sup>ないて余力<sup>い</sup>あれば、則ち以て文<sup>い</sup>を学<sup>い</sup>ぶ」(「学而第一」六)

金谷治の訳によれば、「若者よ。うちでは孝行、そとでは悌順、慎んで誠実」(一部改訳)たれ、と言う。この「孝」は、孔子の思想においてとても重要な意味を持つ。孝の語源によると、「年寄りをささえる子・親につくす」<sup>18)</sup>の意という。その意だけでは行動に移せない。「孝」とはどうすることなのか、あるいはどうしたらいけないのか。

「生けるにはこれに事<sup>つか</sup>うるに礼を以てし、死すればこれを葬<sup>ほうむ</sup>るに礼を以てし、これを祭るに礼を以てす。」(「為政第二」五)

孝は礼のかたちを採り、礼は孝によって実現する。呪は巫女の祭りごとであるが、その祭りごとに意味をつけて儒の祭礼とする。民の伝統的祭りごとを継承しつつ、礼として合理化する。そのことは、呪が「鬼」につかえ、その怒りを鎮めるのに対して、孔子の儒は主体的自己として礼を執り行うのである。つまり、伝承されてきた祭りごとが人間の生活の一部として取り込まれ、組織化されるのである。それは、孔子にとっては、巫女たる母の遺徳を継承しつつ、それを超えることではなかったか。

「死すればこれを葬る」、この葬礼は礼のなかでも基本とされる。その関連で、以下の文節を引こう。

「父在せば其<sup>いま</sup>の志<sup>み</sup>しを觀<sup>み</sup>、父没すれば其<sup>ぼつ</sup>の行<sup>い</sup>ないを觀<sup>み</sup>る三年、父の道<sup>い</sup>を改むること無きを、孝と謂<sup>い</sup>うべし」(「学而第一」二)

ここにいう「三年」とは、親の喪に服している期間を指している。孔子はその服喪

17) 鎌田正・米山寅太郎『漢語林』大修館、1994年、399頁

18) 『漢語林』前掲書、890頁

の行動を「孝」と呼ぶ。「喪」の慣習は当時すでにあった、というが、孔子がそれを「孝」に取り込んだ。かれは、「喪」ではなく「死」を重視したからであろう。父母の死、遊歩していた青年時代に会った多くの死、路上に朽ちた死、その経験のなかで「死ぬこと」の意味に気づいたのであろうか。生きることの延長に、といっても単なる時計的時間の延長ではない、人間的生の完成として死がある、ということについての意味づけについてである。他者の死が伝えるのは、人の生物的な有限性としての死、と同時に人間的な死の可能性についてである。「孝」について問われた孔子は、「敬せずんば何を以て別たん」（『為政第二』七）と応える。つまり、形式化しがちの葬礼においても、その人間的「尊敬の念」の有無を問う、と論したのである。

## (2) 老子という人

孔子の同時代に老子がいた。老子の風景には神秘が漂う。老子に関して知りえている情報はわずかである。『史記』によれば、姓が李、名が耳、孔子よりもやや年長、周の長安、その文書収蔵館の館長であったが、ある日、するりと関所から西へ立ち去ったという。

『老子』は81章5千文字の詩的な書であるが、いつ、誰の手で記述されたか、それが不明、ここでも謎めいている。実は、『老子』の一端が出土したのであるから、これはこれで論争の種に事欠かない。1973年に湖南省の第三号漢墓から、1993年には湖北省第一号楚墓から出土した。前者は絹に書き込まれており「帛書」と呼ばれ、後者は竹簡に書かれていて「楚簡」と呼ばれている。<sup>19)</sup> この点に関する詮索は専門研究者に任せるとして、『老子』の主題、つまり「道」の周辺を探索してみたい。それには、第81章の最終章がまずもって老子の主意に近いと思われる。その全文を引こう。

「信言は美ならず、美言は信ならず。善なるものは弁ぜず、弁ずる者は善ならず。知る者は博からず、博き者は知らず。聖人は積まず。既く以て人の為にして、己れ愈いよ有り。既く以て人に与えて、己愈いよ多し。天の道は、利して害せず、聖人の道は、為して争わず。<sup>20)</sup>

末尾のさらにその末尾だけを採り上げよう。「天の道は、すべてのものに利益を与えて損なうことはなく、聖人の道は、何かを為しても人と争うことはない。」<sup>21)</sup> 天の道は対世界、聖人の道は対人、という、それぞれのあいだでのありかたを問うている。

19) 神塚淑子『老子 - <道>への回帰 -』岩波書店、2009年、8頁

20) 『老子 - <道>への回帰 -』前掲書、第81章、215頁

21) 『老子 - <道>への回帰 -』前掲書、216頁



なぜ他者と衝突しないのか。それは老子の主張する「無為を為す」という特有の思想性の故によってである。

「足るを知れば辱しめられず、止まるを知れば殆うからず、以て長久なる可し。」<sup>22)</sup>

また、『老子』は尻取り形式で、詩的に語る。  
原文をまず紹介しよう。

「人法地，地法天，天法道，道法自然」

それを読み下すと以下ようになる。

「人は地に法り、地は天に法り、天は道に法り、道は自然に法る」<sup>23)</sup>

ここに天地、道、そして自然、老子の基礎的用語は組み合わされている。上記引用文に先行する文節を合わせて引きたい。

「物有り混成し、天地に先立ちて生ず。寂たり寥たり、独立して改めず、周行して殆れず。以て天下の母と為す可きも、吾れ其の名を知らず。之に字して道と曰い、強いて之が名を為して大と曰う。」<sup>24)</sup>

神塚によれば、老子の言う「道」とは、「天地ができる前から存在し、万物を生み出すという大きな働きを行った何ものかに対して」<sup>25)</sup> 老子の命名した名前である。しかも仮につけた名前である。他の章では、地上の権力たる「帝」よりも先にある、そしてつかもうとしても姿なきもの、しかももとに戻ってくるのだ、という。だから、わたしたちの前にあり、上にあり、つねにわたしたちに動かされない何かである。

### (3) 孔子と老子の境界

孔子と老子とを対照化しつつ、少し具体的にその相違を探ってみたい。

主題は「水」としよう。

まず、孔子の河のほとりに立ちての語りである。

22) 『老子 - <道>への回帰 -』前掲書、第44章、199頁

23) 『老子 - <道>への回帰 -』前掲書、第25章、215-216頁

24) 『老子 - <道>への回帰 -』前掲書、第25章、119-120頁

25) 『老子 - <道>への回帰 -』前掲書、121頁

「逝く者は斯くの如きか。昼夜を舍めず。」(「子罕第九」<sup>26)</sup>)

黄河の川幅は広い。孔子は、目線を落とし過ぎし往く流れを観ている。往く川の流  
れは人生に譬えられることが多い。流れにある水はいつも替わっている。同じである  
ことはない。だから、同じ水に出会えることはない。その独白は感傷的に伝わるが、  
それは孔子の生涯の道行きに関わるのであろうか。

ちなみに、金谷は二つの異説を紹介している。一つは「不遇な人生の詠嘆」、いま  
ひとつは「学者を勉励」するものだという。さて、孔子の語りを読み解くために、黄  
河流域に在り後世にまで峻烈なまでの光彩を放つ、孔子の同時代人たる老子を登場さ  
せたい。

その老子、これは著名な文節である。

「上善は水の若し。水は善く万物を利して争わず、衆人の悪む所に処る。故に  
道に幾し。」<sup>27)</sup>

詩的で楽しい。だが、その「水」をどう解するのか。再び、神塚の現代訳に拠ろう。

「最上の善とは、水のようなものである。水は万物に大きな利益をもたらして、  
しかも争うことはせず、多くの人々が嫌がる低い場所にいる。だから、道のあ  
り方に近いのだ。」<sup>28)</sup>

私は、水は「争わず」という表現に引き付けられる。水自身が「意思」をもつかの  
ように看做す、その観想が面白い。と同時に、老子は「水」を、彼の主題たる「道」  
の理解を求める道筋とする。

孔子と老子、その生活を紡ぐあいだには黄河がある。その河は氾濫を繰り返す御し  
がたきものである。その理不尽さのなかに上流から運ばれる豊穰な土がある。孔子は  
「礼」の実践を通じての親と子という天地恵みの「おのずから」に力点を置き、親と  
子を基軸とする人間関係の築きを語る。その「自然」の基本は親と子との血縁関係で  
ある。

老子は「道」の理解を得るために「水」について語る。その意は第78章に示され  
ている。

26) 『論語』前掲書、

27) 『老子 - <道>への回帰 - 』前掲書、第8章、209頁

28) 『老子 - <道>への回帰 - 』前掲書、第8章、209頁

「天下に水より柔弱なるは莫し。而して堅強を攻むる者、之に能く勝る莫し。其の以て之を易うる無きを以てなり。」<sup>29)</sup>

まさに、水は固まったあいだに進入してそれを溶かす。だとすれば、人は柔弱であれ、水の如く低きあれ、その人間的ありかたが問われている。

老子にありては人間と水は同じ位相にある。今日の「水」は上水道からの水を使用し、その排水が浄化されて河川・海に戻る。それが蒸発して水滴として大気において雲となり、やがて降雨として地上に降りて山・河川・海に還流する。水の循環である。それは水を人間の生活過程を貫通するエコロジカルな循環の一端である。

老子の立ち位置は全く異なる。老子は「水」を「弱気もの」とするとともに「強気もの」として拵んでいる。それは上記の文節で明らかである。

上記の意は、天下で水ほど柔らかで弱々しいものはない。しかし、固くて強いものを攻めるには、水にまさるものはない。<sup>30)</sup> 以下、私なりの解釈だが、老子の意に沿うとすれば、「弱気もの」であれとの語りである。なぜ「弱気もの」なのか、孔子は学べというが、それは「強気」ものへの誘いではないのか。大切なことは「脆弱さ」を基にした語りである。

水は低きにつく。また物を溶かす。水(=H<sub>2</sub>O)の酸素原子はマイナス、水素原子はプラス、その二つの電気が物のあいだに入り引き離す。「柔弱さ」という特性が、溶解という強さを学んでいく。弱さは、だが強さを伴う。

同時期になぜ孔子と老子という相異なる語りが生まれ、境界が形成される。再び『論語』から引きたい。

「身体髮膚、これを父母に受く。敢えて毀傷せざるは、孝の始めなり」<sup>31)</sup>

金谷の現代語訳は以下の通りである。

「人間のからだは父母をもとにし、天地をはじめりとしたものである。天地・父母の恵みを受けて生まれ、また養われた自分のからだであるから、自分だけの所有物ではない。 中略 慎んでよく養って、痛めないようにして」

孔子と老子とは、ともに黄河流域での、漢民族固有の文化が興り始めたその戦乱期に、鶴首して待ち望まれた語りの「子」であった。だがその語りの彼方には大いなる

29) 『老子 - <道>への回帰 -』前掲書、第78章、206-207頁

30) 同上、206頁

31) 『孝経』（『論語』前掲書）、152頁

境界が形成されていた。秦が封建的国家として形成され、有史での初めての統一国家となる。「儒」はその統治の正当性の要として組み入れられる。女真族の漢は、漢民族の文化を吸収して「漢化」されつつ、「儒」を国教として組み込む。「道」国家の側に引き寄せたのは、唐の政権であった。その唐および隋の政権期に仏教が侵攻する。いわゆる、「中国三教」、儒教・道教・仏教の競合と共存の開始である。中国文化を基底とする東アジア文化と、同時期に形成されるヨーロッパ的文化とは、ここに乗り越え難い固有の「境界」が形成されるのである。

#### 4. 黄酒と白酒

今日の漢民族での文化的特徴を形成してきたのは、まずは、黄河の流域たる中原に開花する儒の文化である。その祭礼には酒は不可欠であったし、今日においてもその状況は不変に思える。宴席では「礼」が求められるが、もちろん、それは儒教の教えに基づいている。

「飲酒の礼節儀式はいろいろあったが、基本的な原則である上下関係の原則はしっかり守らなければならず、少しでも違反することは礼儀を守らないことであった。」<sup>32)</sup>

その古代黄河流域において、漢民族の酒文化が芽吹き開花する。ちなみに、魯国の酒が「魯酒」として知られていたと言う。<sup>33)</sup> 酒づくりがどこまで歴史を遡れるのだろうか。先に、「龍山遺跡」にふれたが、その先行文化は「大もん口遺跡」、発掘された醸造器とみなされる小口底甕を手がかりに、さらに時代は「半ば遺跡」にまでさかのぼれる。以下、花井の説である。

「今からおよそ 7000 年前に、漢民族の祖先にあたる半ば遺跡の住民が、穀物から酒を醸造していた」<sup>34)</sup> と推定する。

これだけでは酒とは言ってもどんな酒なのか分からない。酒は食卓文化に関わるが、酒づくりには風土やテクノロジーが関わっている。そこで基本的な点について説明しておきたい。酒類を製造方法によって二つに分けるとすれば、醸造酒と蒸留酒とに分

32) 「中国の伝統的な酒文化」(小川喜八郎・中島勝美『本格焼酎の来た道』金羊社、2007年、121頁)

33) 花井四郎『黄土に生まれた酒』東方書店、1992年、85頁

34) 『黄土に生まれた酒』前掲書、26頁

けられる。上記の引用は醸造酒に関するものである。日本では醸造酒は清酒・ビールであり、蒸留酒は焼酎である。中国では醸造酒は黄酒であり、蒸留酒は白酒である。黄酒と白酒のそれぞれに異なる歩みを持つ。

さて、まずは古代での醸造酒の話題からである。「穀物からの醸造」、この指摘の意味は重要である。日本や東アジアには「口噛酒」が伝えられてきた。だが、古代中原にはない。古代では粟で酒を造るのだが、まず澱粉の糖化が必要。口噛みによる酒づくりとは、粟を口の中で噛む、その唾液アミラーゼで糖化が進む。糖化すると天然の微生物が飛び込み、アルコール発酵が始まる。その発酵過程に酒が生成する。

だが漢民族では多くの酒が製造されてきた。酒に醸すのにどうしたのか。実は古代以来漢民族が「麴」を使う固有の醸造方法を創出したのである。まずは、その固有性について検証することにしたい。酒はアルコール飲料であるが、そのアルコールは発酵過程から醸造される。だから、発酵がまず重要な過程である。

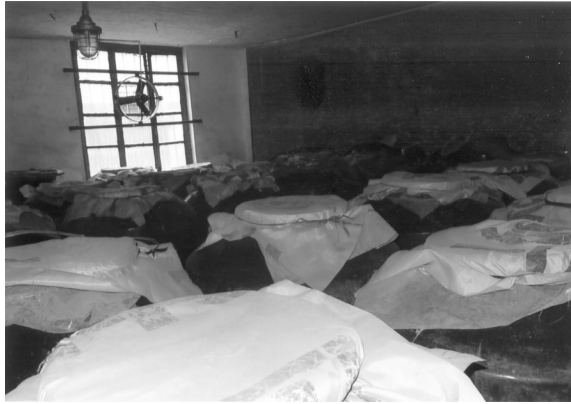
山東省に著名な黄酒がある。花井の研究を基に紹介したい。黄酒に日本で名高い紹興酒があるが、南の紹興酒に対して、北の「即墨老酒」と称賛される銘酒のことである。主原料は黍米、とくに龍眼黍米という品種を使用する。小麦で麴を造り、1年寝かせた麴を使う。主原料の黍米を濃いきつね色に焦げるまで炊く。この焦げ臭さがこの即墨老酒の個性と成る。それに。九泉水という地下水と麦麴を合わせて糖化する。さらに、固形酵母を添加して9日間発酵させる。1年間の熟成ののちビン詰めして市場に提供する。

さて、中国で現在最も愛飲されている酒と言えば、「白酒」である。その産地は黄酒の中原に対して、周辺地域にある。たとえば、「茅台酒」(貴州省)、「汾酒」(山西省)、「五糧液」(四川省)など著名な銘柄がその販売量の多くを占める。白酒の醸造場を訊ねると、日本の蒸留酒の蔵とはまったく異なる情景が目飛び込む。まず、麴を寝かす「室」あるいは「製麴」機が見当たらない、甕あるいはホーローでの沸々と沸き立つ醸造過程がつかめない、さらに竹製あるいは鉄製の蒸留器が座っていない。およそ、日本の蔵を見慣れたものには高い濃度の蒸留酒「白酒」の工場とはとても思えないのである。

その謎は発酵と蒸留とのあいだにあるように思える。その中国に特異な発酵法は「固形発酵」と呼ばれている。その過程を概観しよう。

発酵は「室」でも「タンク」でもない。土中の穴蔵、漢語で「窖」と記すが、それがここでは、「貯蔵用の穴倉」(『中日・日中辞典』三省堂)であり、発酵槽である。土中に2 - 2.5mの深さで縦1.3m、横2.5mの長方形の、まさにあなぐらである。まるで畑の一角なのである。ここで破砕され、蒸されたた高粱や小麦などの穀物に固形麴を加えて窖に移す。その上に蓆をかけ、さらに土を盛って密閉する。10日 - 1年をかけて発酵させる。

図-3 白酒の甕熟成



撮影：豊田謙二

その意義に関する小泉武夫の説が興味深い。

「発酵甕は古いものほどよいが、それは、その甕の土壁や土床には酵母を代表として、名酒を醸すのに不可欠な優れた発酵微生物叢が多数あって、これが製品の優劣を決定させる大きな要因」である。<sup>35)</sup>

このようにして土中の微生物の力を借りて、その地域ごとの特色ある白酒を製成するのである。蒸留過程も特異である。つまり、同じ時間帯に蒸留と蒸しの過程が同時に進行するのである。それは、蒸留 = 蒸し器に蒸気を吹きこむことである。

この発酵時に水を加えない、という固有な発酵・蒸留のテクノロジーによって、1回の蒸留で50 - 70度の高アルコールの蒸留酒を精製できるのである。日本の焼酎のアルコール度が最大で40度程度であることを勘案すると、白酒の精製度数は驚異に値する。

## むすびに

出会いの時、別れの時、あるいは喜びの時、悲しみの時、人は挨拶を交わす。人間以外の動物は挨拶をするのだろうか。人間が挨拶を大切にするのは時間への記憶と意識をもつからだろう。たとえば、今日会えたの何年振りなのか、この別れのあと再びいつ会えるだろうか、という時間意識である。葬礼は別れ逝く人との思い出とともに、再び時を過ごすことのできない悲しみである。そんな時、酒が求められた。

35) 小泉武夫『発酵』中公新書、1989年、180-183頁

反論があるだろう。酒を飲めない人もいるではないか。たしかに、だが飲むのが目的でも、ましてや酔うことを狙ってもいない。私の理解では「一緒に」、という時の過ごし方であり、同時にその時の共感を求めるためのことに思える。酒席では乾杯がある。それは儀礼の一部である。日本では宴席の初めに乾杯があるがこれは挨拶なので、乾杯を繰り返すことはない。中国では、といっても私の体験の範囲ではあるが、酒を飲むたびに乾杯の「礼」がある。礼においては、私が飲みたい時に一人だけで飲む習慣はない。必ず、他者を誘って、「一緒に」杯を空けるのである。「杯を空ける」ということも、日本では理解しがたいが、文字通り杯の空をお互いに見せあうのである。

つまり、中国の礼では、「乾杯」とは杯を空ける、つまり杯にある酒を一緒に飲み干すことなのである。「先ず干して敬を為す」という礼である。私は「孔子の里」、済南市において、酒宴を設けていただいた。私への歓迎の宴席の様子を少し紹介しつつ、本稿のむすびとしたい。

まず、レストランの1室に四角形の卓が用意され、席順は礼の作法によって決まる。まず、招待者側での主宰者が最初の歓迎の挨拶を述べて、酒、もちろん白酒をストレートで乾杯する。その後も、食事の時を挟みながら、招待者側が順に挨拶と乾杯を繰り返した。実は、その挨拶のすべてに、以下の論語の一節が引かれた、というのは通訳女史の驚きの言葉である。

「有朋自遠方來，不亦樂乎」（『論語』學而第 一）  
 （現代訳：朋<sup>とも</sup>あり、遠方より来る、亦<sup>また</sup>楽しからずや）

宴席の最後に、「日本人を誤解していた、今日友だちになれた」と参加者すべてから握手を求められた。アルコール度53度の白酒を乾杯する楽しさよりも、その最後の「友」になれた嬉しさに酔いが回ってしまった。『論語』は禁欲・禁酒ではない。乱れないほどにほどほどに、酒をともに楽しむ、それを「飲酒道」<sup>36)</sup>とする。だが、私はその時すでに「ほどほど」を越えていたが、中国の友はそれを歓迎してくれたのである。

\* 本稿は、2011年度海外事情研究所研究助成事業による研究成果の一部である

図-4 泗水の白酒



出所：山東泗水大安酒業有限公司

36) 「中国の伝統的の酒文化」前掲書、120頁

## The Border Area Culture in Retrospect ~ The Case of Ancient Yellow River Basin in China ~

Kenji TOYOTA

The main purpose of this paper is to clarify the special features of formation in border area culture with particular focus on religious faith of ancient China where a first unification was succeeded on the basin of the Yellow River. In ancient Chinese society for the past two millennia, Confucianism and Taoism have begun to form nearly at the same time during a period of constant warfare and social chaos. Confucianism and Taoism were developed by Confucius (551–479 BC) and Laotzu (580–500 BC) respectively. The boundary between Confucius and Laotzu is based upon the followings that the former is fundamental formation of human society based on parent and children as well as courtesy, specially funeral service (etiquette : 禮), the latter is classic or natural way of life and its power, in short “The Way” (Dao : 道). These two famous religious doctrines were further developed and changed during the period of Han dynasty.

Moreover, these different religions are distinct, soluble, and cross-over. Confucianism has given the teachings for official examination on the one hand, and Taoism has strengthened the self-relief from self-training on the other. By contrast, food-culture between this ancient area, Yellow River Basin, and another district, origin of ferment-brewed-liquor from corn is worthy of special mention. This brew is developed as Huanjiu (黄酒, 紹興酒) and has formed again at the other side of Border-line as Baijiu (白酒), for example (茅台酒).